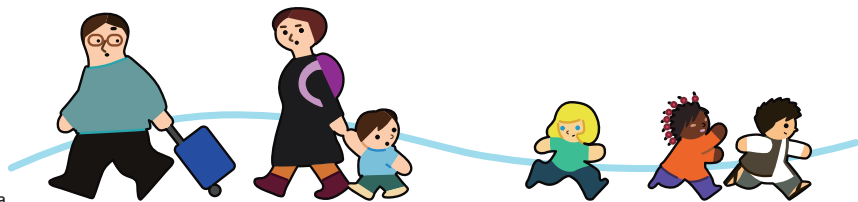


前編

# 家族で走り抜いた二十三月



Illustrated by  
Reona Nishinaga

仕事柄途上国への海外赴任がある太郎は「家族そろっての駐在」を楽しみに、いろいろ思い描いていた。

そして訪れたスリランカ・コロンボ。家族が到着してひと月もたないイースターの日、コロンボを中心に連続爆破テロが勃発する。

スリランカでの生活は「学校閉鎖」から始まった。

(仮名)

## 心細かった最初の駐在

太郎の最初の駐在地はフィリピンだった。妻の恵子はあとからひとりですりピンに渡ったが、海外生活の経験はなく「夫が迎えに来てくれなかったら、携帯電話もない状態でどうしよう」と不安で飛行機の中から泣いていた。

「空港まで迎えに行ったのですが、恵子は泣きながら出てきました」と太郎。住居はビジネスの中心地マカティ市。高級な商業施設も集中し治安もいい。通

取材・文 高田 和子

いのメイドさんは小さい子を親戚に預けて田舎から出稼ぎに来ている人だった。買い物に連れていってくれたりアイロンがけや洗濯をしてくれたりするだけでなく、フィリピンで生活するうえでのさまざまなことを教えてくれた。いまでも彼女はFacebookでつながっている。四年後、恵子は家族同然の彼女との別れにまた泣いた。

## 待望の家族そろっての海外生活

帰国後十年ほどしてスリランカ駐在が決まった。家族は長女の美子と次女の英子が加わり四人になっていた。

美子の小学校の卒業式を済ませ、太郎より一カ月遅れて三人でスリランカに向かった。

「ふたりの子持ちになった恵子は最初の赴任時とは見違えるように頼もしく見えました」と太郎。

家族が引越した四月はスリランカの雨期だった。

「毎晩土砂降りの雨か雷雨で、眼鏡が結露するほどの湿度。都市部には高層ビ

ルやショッピングモールがありますが、一步道路を外れるとベニヤ板の屋台がひしめき合う商店街があり、現地の人々の活気を感じることができません」

美子の見たコロンボだ。

公用語はシンハラ語とタミル語で、英語も使われる。仏教徒が七〇パーセントを占めるが、ヒンドゥー教、イスラム教、キリスト教の信者もいる。町はさまざまな宗教の建造物が混在する不思議な空間だ。

毎月満月の日は「ボヤ・デイ」という仏教の祝日で、学校や会社が休みになる。仏教徒は白い衣服を身につけてお寺に行き、仏教徒でない人も白いものを着る。

「日本では宗教が身近にないので子どもたちには新鮮に映ったようです」と恵子。

## 連続爆破テロが勃発

二〇一九年、イースターの四月二十一日に過激派イスラム組織による連続爆破テロが勃発。コロンボを中心に国内八カ所で大規模な爆発があり、そのうちのひとつが家族が住むコンドミニアムの隣のホテルだった。

その日から、ホテル近辺では軍が銃を構え、眼光鋭く警備を始めた。情報が錯

テロ後、外出もままならなかった  
ので、コンドミニアムの  
プールでたくさん泳いだ



綜そうして何が起こっているのかわからないうえ、通信も遮断され、おもだつたSNSは十日間ほど通じなかった。通じるのは日本のLINEだけだった。

「日本の友人とのLINEのやり取りにほんとうに救われました」と恵子。

コンドミニアムの下にあるスーパ―は翌日開いただけで、それ以降は無期限閉鎖になってしまった。

「冷蔵庫は空だったの  
で決死の覚悟で買い出し  
に向かいました」と恵子。  
コンドミニアムは襲撃されたホテルの隣だったため外出が制限され、不安な毎日だった。子どもたちはいまでも、タイヤが破裂したような音や爆竹のような音を聞くとギョッとするという。

外出もままならない生活のなか、メイドさんは家族のためにスリランカ料理をつくったり、いろいろな話をしたりしてくれた。おかげで家族は少し外の空気に触れる気分が味わえた。

## ◆ ◆ ◆ コロナ生活をリセットする

英子はブリティッシュ系インターナショナルスクールの空気がなく、ひとまず日本人学校に通うことになっていった。一方、美子は同じインターナショナルスクールに合格はしていたが、入学手続きをしないうちにテロに遭ってしまった。そのまましばらくの間子どもたちの学校は閉鎖されてしまったのだ。

美子は毎日家において、ただただ「インターに行きたい」と繰り返していたが、ある朝、「…疲れた…」と静かに泣きだしてしまった。その姿を見て、恵子は「まづいな」と思ったと言う。

「その日、みんなそれぞれ我慢していたものを泣いて吐き出しました」

そして恵子は「いったんリセットして帰国する」という結論を出す。太郎は理解しつつも「家族全員での滞在は最初で最後だろうから、いろいろ思い描いていたのに」と複雑な心境だった。

「私はまたスリランカに戻ることも考えていましたが、夫はもうみんなは戻ってこないだろうと悲観していました。つかかったらしく三日間ほど珍しくお酒を飲んでいました」

帰国後、美子が「ひと月前に『行ってくるね』と華々しく出てきたのに一カ月

で帰るのはいや」と言うので、三月までいた学区ではなく、恵子の実家の近くの学校に通学することにした。

五月半ば、晴れて中学生になれた美子はしばらく学校になじめなかったが、合唱部でピアノを弾くことになってから学校生活がうまくなってきた。英子も小学校で合唱に誘ってもらい、それをベースに楽しく過ごすことができた。

ふたりは一学期間通学し、共に八月にNHK合唱コンクールに出場してからふたたびスリランカに向かった。

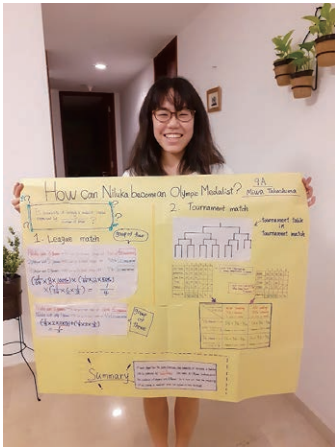
インターナショナルスクールは、テロの影響で帰国した子どももいたため、英子の学年にも空気ができていた。晴れてふたりそろってインターナショナルスクールに通えることになったのだ。

## ◆ ◆ ◆ つかの間の平安な日々

美子は、初日にスリランカ人のクラスメイトに「オマエハモウシンデイル!」と言われた。それも素晴らしい発音で。

『「北斗の拳」の主人公の決めゼリフだと知らずびつくりしました。同時にこのカオスな状況にワクワクしました」と美子。

その後も「センバイってどういう意味なの？」など、アニメファンの親日ぶりがよくわかる会話が行き交った。



最初は英語に苦勞した美子は、プレゼンなど事前に準備できるものに力を入れて弱点を補う努力をした。

話す力を補うべく課題の提出でがんばった。物理で提出した過冷却水の研究では、まず過冷却水をつくり、それに衝撃を与え一瞬で凍っていく様子をパソコンスキルを駆使してビジュアル的に映えるものに仕上げた。さらにBGMまで丁寧につけて提出した。

「振動を与えないように、冷蔵庫を使うときは家族で気を遣いました」と恵子。その結果、クラスの最優秀賞として先生からカギの形のボールペンが贈られた。それは英語に劣等感を抱えるなか、とても大きな自信になった。

「メイドさんに『明るい未来への扉を開くカギ』と言われました」と恵子。



クリスマスに校庭に設置された手動式観覧車

勉強はたいへんだった。特に美子は中学生レベルの授業に英語でついていかなくてはならない。持ち前のリスニング能力と不思議な勘で、内容はなんとか理解できたが、話すのは難しかった。

## インターでの行事

英子はジュニアの水泳大会で二十五メートル自由形に出場した。その力強い泳ぎに恵子もビックリしたという。トップでゴールして、満面の笑みだった。

テロ後、コンドミニアムのプールくらいにしか遊びに行けないなか、根気よく練習を続けたのが実を結んだようだ。

学校行事で恵子の思い出に残ったのはUNデイだ。親たちが出身の国や地域のブースを出すイベントで、竹を調達して竹林に見立てたJAPANブースでは七夕飾りをつくり、大量の海苔巻きをふるまった。日本人の母親たちが団結して準備に臨み、テロ以降散り散りになっていた横のつながりを取り戻すことができた。美子と英子は浴衣を着て友人たちと元気にブースを回った。

「ふだん目にする機会がない子どもたちの様



UNデイでの英子 コロナ前に飲食を扱うイベントに参加できた貴重な体験

子を垣間見ることができ、たくましさを感じました」と恵子。

各国の民族衣装が目にも鮮やかで、それぞれの国に思いを馳せるよい機会になったようだ。

クリスマスに移動式の大がかりなアトラクションが校庭に設置されたのには驚いた。観覧車が手動だったのだ。

一月には英子の二泊三日の林間学校があった。バスに乗り込むまでは不安そうな表情で、恵子も心配していた。

林間学校では川を渡ったり、山登りをしたり、さまざまなアクティビティを楽しんだらしく、英子は出発時とは違うリラックスした顔で戻ってきた。

「女子同士の口論の様子を詳細に家族にレポートしてくれました。周りの状況を理解できていたようです」と恵子。

こうして軌道に乗りはじめた学校生活。けれどもたった半年でまた中断する。子どもたちは世界を襲った新型コロナウイルスの感染拡大に翻弄されるのだ。

(次号後編に続く)

本欄では取材対象家族を募集しています。50ページのEメールアドレスへお気軽にご連絡ください。